

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	詩人論（其三）：論説
Author(s)	鎌田，辰郎
Citation	龍南會雜誌， 29： 20 - 34
Issue date	1894-10-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4431
Right	

社會道德の盛衰、世道人心の興廢、殆んど此一點に繫がる。世の新俊勇猛の文學者諸子、何ぞ此の版圖に向て、諸子の熱血を灑がざる。

詩人論 (其三)

鎌田 辰 郎

道 念 的 詩 人

一 道 念 的 詩 人 と 宗 教 家 (又 預 言 者)

底を叩けば同一なり。総稱して、カトリックの所謂 (Vates) と云ふべし。カトリック説さけらく、

詩人と豫言者とは現在に於ては其記號に於て大に異なれり。往昔の言語よてはこの記號は同意味ありき、Vates として云へば詩人と豫言者とは共に意味するあり。げに詩人と豫言者とは常に詩多の類似せる意味を有せり。根本や相同じ。特に兩者共宇宙の神秘 (the Sacred Mystery of the Universe) を洞觀すと云ふ最要點に於て然りとす (以下略)

と。カトリックは茲に一概に詩人と云へど其を分拆し見ば思ふにわが言はんとする道念的詩人を言ふには非るが。蓋わが所謂道念的詩人とは宗教的倫理的觀念を發揮する詩人にして、カトリックが所謂詩人は是の如き意味に於ての詩人あればあり。更らに渠説さけるは、

我は將よ曰はんとす。たとひ、人は此神秘を (Divine Mystery) を忘却するとも、Vates 即ち豫言者と詩人とは共に此に貫徹して、此を痛激に知らしめんとて送らるる者なり。これかれの天職なり。他人が嘗て共に現在したるよりは長く住める神秘を吾等も現はすにあり。人は是を忘却するもかれ是を知る。我は言ふことを得べし。彼は是を知らんとて降臨せり、無意識にしてこれを求め、遂に

是中は佳居に限られたり。更に言へば直覺と信仰との外他は俗聞なし。彼れ蓋聖人たらざるを得ざればなり。人は事物の表面に居るとも、かれは必ず其眞髓に居らざるを得ざるなり。更に言へば若し人は宇宙を弄たづなひねにすとも、かれは是と熱心なる者なり。かれ先づ高潔なる徳に於て 'values' なす。詩人と預言者とが「公開せる秘密の共分人たる點に於ては同一あり」。

○「高潔なる徳に於て 'Values' あり」と云へるは明瞭に道念的詩人たるを揭示したり。されば、我は然らば「オールの以上の言葉をは、道念的詩人」少くともこゝに類似せる——と豫言者との類似する所と見て妥當あかるべし。一步進めて、其區別を説明して

「吾等は言ふことを得べし。豫言者は寧ろ善惡、義務、制止の如き道徳に關せる神秘を看取する者にし。詩人は獨逸の所謂美妙等の如き美に關せる者を看取する者なりと。一は吾等の爲すべき者の顯示者にして、二は愛すべき者を現はす者とも云ふべし。しかばわれは此等の兩領分は互に連絡を分斷せねばならぬ。豫言者は愛すべき者を看るあり。さらば寧ろ爲すべき者を知るべけんや。

嘗てこの世は反響したる高調なる聲あり曰く「野の百合花を思へ、勤めず、續かざるあり、されどシシモンは榮華の極の時たにも此花の一にだも及ばざりき」と是れ豈に「美妙」の深奥を洞見したる言ならざる。世の帝王の装に勝る「野の百合花」は賤しき土壌に生ず。是れ豈に「美妙」の深海より汝を窺ふ妙ある眼あらざる。この粗造なる世界にして、其表面の如く本体も此の如く内部の美妙あらば如何にして、この花を作れる。此觀察點に於ては、幾度か躊躇孤疑したるギョオテの言葉も又意味の實あり。かれ暗示しけらく「美妙は善よりもいやけだかし。善は美妙の中に含蓄せらるる妙あり」と。これめが骨で「天淵の異なる如く虚偽より異なれり」と云へる眞の美妙なれや。詩

人と豫言者との異なりて同じきこと此の如し。

と云へり。善い哉言や。われ嘗て「文學と宗教」を論じて曰く

嗟呼人間ある者は胸底常に (Divinity) の觀念を有せざる可らず。宗教は是を有せしむる最要素には非るか。人間は愛の觀念を包藏せざる可らず。而して宗教は是を授くる者には非るか。人間は信を行ひ。美を思ひ。真を慕ひ。善を行ふべき義務を有する者なり。宗教は此義務を履行せしむる者には非るか。人間生れて一物なし。而も彼等は羊腸たる艱山難川を踏破せざるべからず。宗教は實に之が先導者にてと非るべし。然り。人間が如何に宗教に支配せらるゝやを知らば人心を中心とせる文學のみ、豈に獨り、宗教以外に超然たることを得むや。

(因に云ふ。この文學とは純粹文學の義に用ひしあり。われは審美的に記せる文章を文學と見つ、然らざるを廣義の文學と見む)

と宗教と文學と密着の關係あるは論なし。或學者は宗教なければ文學なまゝとすら云ひき。果して然らば其各創造者たる宗教家と詩人、特に道念的詩人どが相關係せるは言を待たずて明瞭あらむ。思ふにカーショルは「現はす人」の上よりして關係を述べたるを。我は(前引照に於て「現はれたる者」の上の關係を述べたるあり。「現はれたる者」の關係するは、現はす者の關係ありて然るに非らずや。

依是、是を見れば、詩人(特に道念的詩人)と豫言者(宗教家)との差異と類似とは明白とありつらむ。數言にして是を言はしめば道念的詩人とは宗教家が「美」の外被を着けたるありとや言とむ。更に言へば宗教家たるゆゑならず其宗教的、倫理的思想をば詩に吐露する者あり」

アニンンは道念的詩人あり。(勿論又哲學的にして情想的なる所もあり)かれが讀したる

「道念」を讀みあるは其他の教義的詩を繙かば、燦爛たる詩裝の裡、偶然たる宗教家の面目を認むるあるべし。宜なり人彼を評して「彼は大教師あり」と云ひしことや。又はウチーズウチーヌが吐露したる靈魂不滅の歌や、「エキスカルシモン」を窺はゞ、白雲次第に散じ淨然洗ふが如く、翠然たる宗教的面相と看取するなるべし。さてはダンテの如き、クロフストックの如き、大西洋を望ではフライアット、メダフエルロ等の如きは眞相を扣けば皆宗教家あらぬぞや。

二 道念的詩人の種類

天地間に二性あり、支那に於ては陰、陽と云ひ、泰西に於ては、積極、消極と稱す。(陰陽と積、消との間多少意味の廣狹はあきと) 明暗あり、善惡あり、男女あり、加減あり、損得あり、勝る者は「勝」と云ひ、劣れる者は「負」と云ふ、表あれば裏あり。物として皆この二性存せぬはなし。山に於ては高低あり、川に於ては深淺あり、繁生する者あれば枯死する者あり、或者は怒髮冠を衝き、或者は忻喜雀躍す。是れ靜かに道念的詩人を分類し來る時は又この二性の詩人を看出すあり、一を樂天的詩人と云ひ、一を厭世的詩人と云ふ。

イ 樂天的詩人

かれ物を見る、明を看て暗を看す。表を知て、裏を知らず。知らざるに非ず取らざるあり。善を好むで惡を拒む。喜祝して、悲鳴せず。悲鳴せざるにほらず、悲鳴するも益なきを思へばなり。要するに、かれ積極を望んで走り、消極に背きて去る。

天地萬物を徂るに驍々時は「世は實に演劇場あるか」と嘆せぬ人やあからむ。輕車肥馬に乗するは

と云ふの貴人あるを知る。襤褸を繋ひ、洗足あるはわれその貧人あるを知る。骨相違剛ある者あれば、瘦骨稜として蒲柳に似たる者あり。笑ふ者あれば、悲しむ者あり。天地は眞に騷擾混亂せる巢窠あり。此間に超然と對て希望充溢、精神活潑、人生の眞軌道を信じ、天職を重むじ、道念高く、理想深く、美を歌ひ、人生を詠する詩人あり。是を樂天的詩人と云ふ。

樂天厭世兩詩人と必ずしも道念的詩人中に限らず、哲學的詩人中にも情想的詩人中にも存在すべきものと云ふ。兩詩人は多く論理的に人生を觀念し、宗教的に天地を思ふ者あればわが特更に道念的詩人中に入れざるを咎むる勿れ。

かゝる言を挿みつゝ、これは今や進んで樂天的詩人の模範を尋ねて以てその性行を追はむと欲す。

英文學史上に驚駭すべき二個の盛大なる文學時代勃興せき。しかも共に女皇の治世あるは更らに奇とす。曰く一をエリザベス朝の文學とし、二をウィクトリア朝の文運とす。一は戯曲隆盛を極はぬ。二は叙情詩勢を熾んにす。エリザベス朝は暫く置きて、熟らぬウィクトリア朝の詩人を點檢し來れば理想高遠、道念深き詩人の許多を看出すあり。第十六世紀よりして人生觀低く、信念淺薄なれば思想十八世紀の末葉迄疾風の如く歐洲の野を靡し、一陽來復懷疑的傾向頗に趣を變し、物質的文明騒々として進歩し來るにもかゝらず、宗教的觀念大に勃興し、煤煙漂々の裡、氣笛喧騒の裡、竊窺天使の如く、鳳聲朗々たる天成の道念的詩人は輩出しぬ。うがあらにウチナーズウチス、とテニソンとは實に樂天的詩人の上乘あるものと云はむ。野卑と賤しめられ、淺薄と嘲られまたはパイロンよとしてばへる。其の如くは、
 And Wordsworth, in a rather long excursion

(I think the quarto holds five hundred pages),

Has given a sample from the vast version

Of his new system to perplex the sages;

"T is poetry — at least by his assertion,

And may appear so when the dog-star rages —

And he who understand it would be able

To add a story to the Tower of Babel.

From "Don Juan."

と冷笑せられ、年々尙ほ自重直信終季として泰山の如く、天命是れ思ひ、天職之れ従ふ。悠々自適して敢て人生を輕侮せず。且にはラ・メスル山嶺に攀ち、夕には蘇國湖畔を彷徨ひ、郭公に思を寄せ、小女を歌ひ、羊牧者を誄し、幼時を追憶しては無限の悲哀胸中を響らすも、忽ち晴れては

We will grieve not — rather find

Strength in what remains behind;

In the primal sympathy

Which, having been, must ever be;

In the soothing thoughts that spring

Out of human suffering;

In the faith that looks through death,

In years that bring the philosophic mind.

From "Intimations of Immortality From Recollections of Early Childhood."

我等は悲まず。―否、寧ろ
嘗てありたる、又あるべき、
人の痛苦より生ずる
死を通して、窺ふ信念の中にて、
すこやかさを見出す。

後に残れる者の中にて、
純なる同情の中にて、
慰撫の思の中にて、
哲理の思想を持たらする年の中にて、

の光風露月の胸中とある、幼稚の折慙ひし縁陰清樹、指し笑ひし蒼天の虹龍、今や消失して見るに由
あし。つらく人生を觀すをばいかに無常あるか。かれ一旦は憂愁全く心胸を擾すも、恰もこは陽
光の雲霓に異ならず。霧散まては又八面玲瓏として一介の塵埃だにあし。テニンソンの所謂

Clear and bright it should be ever,
Flowing like a crystal river;

Bright as light, and clear as wind.

清川の如く流れて、

清冽にして、

光の如く美はしく

風の如く清からむ。〔詩人の吟より〕

の語移えて以てウチーズウチーの豁然たる胸裡を説明し得べし。

西曆一千八百五十年詩聖ウオーズウチーの逝くや、神と自然と人間とを覺悟したる道念的詩人其
跡を繼ぎぬ。これを誰れとかなす。これを豈に一千八百九年八月英國リンコルンシャー州ワマルビーに
始めて呱呱の一聲を放ち、始めや、點滴徐ろに若下を潜むが如く枯葉朽木參差たる間を通り、次第に
水勢を爲して泉となり、石に激えては瀨とあり、涵澹水を湛えては蒼々たる深淵となり、奔流とあり、

湖水となり、遂に注ぎて大海に入るが如く、滔々として英詩界を氾濫せしめ、僅に十有九にして愛人譚をもつし、再び “Timbuctoo” を歌ひ、漸く名聲高くありては「佳人の夢」(A dream of fair woman) となり、「美術宮」とあり、暫く影を隠しては忽ち又 “Ulysses” 及び “Tockley hall” の人生觀を詠し、沈寂を擧げず、涵澹蓄積しては遂に偉大幽玄なる世界觀を包藏せる “In Memoriam” を吐露し、バカード、テールルをして「可成的バイロンを除きてはかれが如く人民に向て詩に於ける自然の慾望を滿たしめたる英國詩人はあらず」と呼ばしめたるアルフレッド、テニン卿に非ずや。

テニン不朽の傑作を “In Memoriam” とす。これ一千八百五十年即ち現世紀の眞半にして、一躍して “Poet Laureat” の月桂冠を戴きし年に匿名にして出版せられたる者あり。時は情想横溢せるバイロンの詩、悠揚艶麗あるシェリーの叙情詩人心を収攬し、人は炎々たる感情的詩を慕ふて、寧靜高潔ある道念的詩を愛せず。加ふるに物質的文明の潮流は到る處を蹂躪え、近眼の庸俗は七を擲て世界は物質的時代とあらむとすと告げしめたる時ありけり。思ひきや、一撃此詩人に由りて宇宙の大絃琴を彈せらるゝや、天下は靡然として、沈痛ある音響を側聽し雙手を擧げてこの新聲を歡迎しぬ。

我は今暫くテニンの樂天觀を尋ね見む。

テニンや始めは飽まで人世を疑ひぬ。冷露旦に結びて夕に消ゆ。墓なきは人世あり。前途遼遠滿腔の希望を抱きて、人世の航路を進みし最愛の友は墓なく夭死せぬ。テニンは嘗てかれと生死を共にし姻を結び將來は街を並べて馳驅せんと欲しき。然るに一陣の疾風は端なく船を沈没せしめて人海の藻どあしぬ。於是乎無限の悲痛抑制す可らず、琴を提げしは忽ち

長くして、麗はしからぬ街の

暗き家の門に又れ再び佇む、

るの門は開くる手を待ちつゝ

其手は今や握るにすべし——

穢惡ある者の如く、

渠今やあらず、遙かめきたにあり。

霽々たる雨は物凄く降りて、

Dark house, by which once more I stand

Here in the long unlovely street,

Doors, where my heart was used to beat

So quickly, waiting for a hand,

A hand that can be clasp'd no more,——

Behold me, for I can not sleep,

And like a guilty thing I creep

At earliest morning to the door.

He is not here; but far away

The noise of life begins again,

And ghastrly thro' the drizzling rain

On the bald street breaks the blank day.

胸に動悸えて待ちたる者なりけり。

看よ、我は睡るおと能はず、

曉毎に此門に匍行す。

浮世の騷擾は再び起りぬ。

街の寂寥とを破りぬ。

と歌ひぬ。ちれば逝きし人は歸らぬやうなし。ちれば胸中の悲哀はこの道理もて息むべきか。人は

死を歎くの無理なると知る。ちれば「情」と「理」とは往々にして衝突せるものなり。テニソンは更ら

友を懷ふて憂愁に堪へたるあり。

Wild bird whose warble, liquid sweet,

Rings Eden thro' budded quicks,

O tell me where the senses mix,

O tell me where the passions meet,

Whence radiate: fierce streams employ

The spirits in the darkening leaf,

And in the midmost heart of grief

Thy passion clasps a secret joy:

And I — my hard would prelude woe —

I can not all commands the strings:

The glory of the sun of things

Will flash along the chords and go.

吁、朱弦誰に向てか弾せむ。

人世の恨事愛を割かるゝより苦痛なるはなからむ。テニソンは實に「母の子に於けるが如く、わの
が兄弟より親愛」ある親友を奪はれたり。年々歳々花咲き花散り、六花飛び、六花消ゆるも、「暗影」
(shadow) 友を包覆し去りてよりは空しく幽房に沈思するのみ。テニソンの心胸は五里霧中の者と
あれり。懷疑の翼は殆んど心の半を包み去りぬ。無限の深淵は口を開きて陥落するを待てり。かれは
今や一葉の片舟に掉して大海に浮沈する身とありぬ。疾風は一陣二陣次第に加はり、鉛色の黒雲は

刻々重り來れり。陽光漸々影を収めて地平線下に沒せんとす。知らず、何人かこの淵に臨みて厭世の人と變遷せぬ者ぞ。「あすありと思ふ心の仇櫻」のいかにもテニソンの境遇此の如くありけり。「唯水の泡にぞ似たりける」。何ぞ悲鳴する言葉の東西相似たる甚しきや。看よ渠が悲痛の如何に烈しかましかを。

O yet we trust that somehow good

Will be the final goal of ill

To pangs of nature, sins of will,
Defects of doubts, and taints of blood

That nothing walks with aimless feet;

That not one life shall be destr oy'd

Or cast as rubbish to the void,

When god hath made the pile complete

That not a worm is cloven in vain;

That not a moth with vain desire

Is shrivell'd in a fruitless fire,

Or but subserves anothers gain.

Behold me know not anything;

I can but trust that good shall fall

At last — far off — at last, to all,

And every winter change to spring.

So runs my dream: but what am I?

An infant crying in the night:

An infant crying for the light:

And with no language but a cry.

吁、吾等は信ず、兎に角善は、
苦痛も、罪も、

物として目的なくして行くものなし。

一個の生命も之を破壊し

一介の微虫も無益には棄てられず、

あだある火中よ入らず、

看よ、我は何事をも知らず、

必ず凡ても物に臨み

我此の如く夢みぬ、さはれ、吾は何物ぞ。

暗に叫ぶ赤兒の如く、

未だ知らず、テニンとこの境域に臨んで一步をも轉する能はざりしか。乞ふテニンをして歌はしめよ。

I will not shut me from my kind,

惡の終極の目的あるべきを、
懷疑も血痕も。

苟も神が是を作りたらむには

廢物の如く破壊せしむることを能はず、

一個の蜉蝣も、あだし望もて、

又は只他の利益のみにも生れず。

只善は遂に——永遠の後に——

而して冬は必ず春に變するを信ず。

只叫ぶ外言葉なし。

光を求むる赤兒の如く。

And lest I stiffen into stone,
I will not eat my heart alone
Nor feed with sighs a passing wind.

先づチコンンは無益なる悲哀は心を喰ふ去る者たることを覺りぬ。

I'll rather take what fruit may be
Of sorrow under human skies;
'Tis held that sorrow makes us wise,
Whatever wisdom sleep with thee.

更に一步を進めて「悲哀」の果實を求めんと試みぬ。舟は楫の方向を轉せられたり。風雨は少しくゆるぎぬ。黒雲は次第に一重一重にはぎ去られ、來復せる陽光は漸く東天に薄紅を呈しき。先づチコンンは

(夫れ生命は鈍なる礦物の如き者にあらじ。)

That life is not as idle ore.

あるを悟り、次ぎに人間の天職、地位を沈思し來りては

Let him, the wiser man who springs
Here after, up from childhood shape
His action, like the greater ape,
But I was born to other things.

あるを覺悟し。人間は Greater ape に非ずして別に重大緊要なる天命あるを知れり。東坡の所謂、人

の生る 量 無 限 なる 時 空 中 千 萬 萬 浪 蕩 し 去 り 来 り て 悟 徹 せ たる 觀 念 は 果 して 何 ぞ や。鳥 影 蒼 天 を 掠 め、東 天 は 既 に 眞 大 陽 を 現 出 し ぬ。悠 然 大 弦 を 彈 し、船 舷 を 扣 ぎ て 歌 ふ て 曰 く、

永 遠 に 存 じ、永 遠 に 愛 す る 神、
惟 一 の 遠 遠 なる 神 聖 なる 結 果、

惟 一 の 神、惟 一 の 法 則、惟 一 の 根 本、
天 地 は 凡 て 是 に 向 て 移 動 す べ し。

That God, which ever lives and loves,

One God, one law, one element,

And one far-off divine event,

To which the whole creation moves.

と。是れ即ちテニソンの人生觀あり、幽玄なる世界觀あり、愁眉忽ち開き、憂愁杳として跡なし。眞如の月圓かに清風婆娑として胸襟を拂ふ。樂天的觀念於是乎悠然としてわれの胸裡に塗瀉しぬ。更らに樂天的詩人の模範を求めしめば英國革命の卒先者、自由民權の鼓吹者にして崇高偉大なる天地の理想を歌ひ、ティマよりしては

He was speculative and chimerical.

と呼ばれたる、約翰・彌爾頓をや擧げつらねむ。かれが境遇や四邊盡敵にして、偶々家に歸るも、家妻其人を得ず、痛苦潮の如く襲ひ、辛酸雨の如く降るも、尙ほ泰然として眞理を握り、盲目にして尙ほ失樂園を草し、雄偉を思はし、いかに其樂天の情に満ちしやを覺らむ。

われは敢て樂天的詩人とは悲哀を知らず、暗冥を思はず、只徒らに雀躍して樂む詩人を指すにはあらじ、ミルトンの憂鬱 (Melancholy) に沈むや恰も蒼々たる深淵の凄然たるが如し。されど遂に又無限

の光明を求む。アニソフ、ウチーブウチースの如きも、只一時の憂愁を詠せしものを繙くときは或は又厭世家にはあらざるかを憐むあり。されどこは明月に叢雲の懸りたると同じきもの。天の戸を通ふ風は直に叢雲を吹き拂ふあるべし。大洋や颶風浪を瀾え、動搖震盪す、されどこは大洋の眞想なりと思ふは癖目なり。静うも深底に趣かは海波の動搖露にらむ處あらむ。芙蓉峯頭白雪、皚々として千古の偉觀を呈するも、白雲これを被ふこと往々なり。さるを富士は偉觀あらすと云ふは誤らずや。樂天的詩人に於てもまた然り、折にふれては、なしかは涙を催はし。心を苦めざらむ。されどはてには必ずその苦痛困難に打勝るあり、樂天的詩人の特異點は茲にこそ存す。

(道念的詩人の樂天的詩人と普通に樂天の詩を歌ふ樂天的詩人との差異は厭世的詩人を論ずるとき是を説くむ)

追白、賢明なる兩批評家先生より痛撃ある御批評被下難有奉存候。孰れ此論完終の上必ず御答辯可申上候。願はくば責任ある御批評あらんことを乞ふ。

雜 錄

外國爲替手形

教授 有馬 純 臣

爲替とは遠隔する兩地の間に起れる負債を償ふに當つて、現金を輸送するの失費并に危險を省く方法にして、其際使用する一片の証券は即ち爲替手形なり。爲替には内國爲替、外國爲替の別ありと雖も、其理異なることなし。今茲に外國爲替手形の功用、種類、相場等の一斑を説明せん。